

本臨床研究は、ヘルシンキ宣言に基づく倫理的原則に留意し、「ヒト幹細胞を用いる臨床研究に関する指針」及び本実施計画書を遵守して実施する。

18.1. 歯学部倫理審査委員会

歯学部倫理審査委員会は、大阪大学歯学部附属病院長大阪大学大学院歯学研究科長の諮問を受け、臨床研究実施計画書、説明文書（患者さんへ）症例報告書の様式の記載内容にもとづき、倫理的、科学的及び医学的妥当性の観点から臨床研究の実施及び継続について審議を行う。

なお、歯学部倫理審査委員会は、重篤な有害事象に関する審議、軽微な変更以外の実施計画書などの変更については、大阪大学医学部附属病院ヒト幹細胞臨床研究審査委員会に意見を求めることとする。

18.2. 臨床研究の進捗報告

本臨床研究の実施期間中少なくとも1年に1回以上、及び終了時には進捗状況を上記歯学部倫理審査委員会に報告する。

18.3. 被験者の人権及び個人情報の保護に関する事項

18.3.1. 被験者の人権

研究責任者及び分担者は、被験者の人権の保護の観点から被験者の健康状態、症状、年齢、性別、同意能力等を十分考慮し、本研究への参加を求めることの適否については慎重に検討する。また、社会的に弱い立場にある者を被験者とする場合には、特に慎重な配慮を払うこととする。

18.3.2. 個人情報の保護

被験者の同意取得後はデータ管理、製造管理など、症例の取り扱いにおいては全て連結可能匿名化された被験者識別コード又は登録番号により管理され、匿名化コードと氏名の対照表及び氏名記載同意書は施錠可能な書類保管庫に厳重に保管する。また、公表に際しては被験者の名前が直接公表されることがない等、被験者の個人情報の保護については十分に配慮する。

19) 記録等の保存

大阪大学歯学部附属病院長は、保存すべき記録等の保存に関して未来医療センターに委託する。臨床研究に係る文書及び記録等は、臨床研究を中止又は終了し総括報告書提出した日から少なくとも20年間保存する。本実施計画書及び症例報告書は変更・修正があった場合はその履歴を適切に保存する。

20) 臨床研究総括報告書の作成

研究責任者は、臨床研究の中止又は終了後、未来医療センターの協力のもと、速やかに臨床研究総括報告書を作成する。

21) 臨床研究終了後の追跡調査の方法

研究終了後も定期的外来診療により合併症の有無、及び有効性について評価を行い、カルテに記載するとともに追跡調査のデータとして保管する。

臨床研究終了後の追跡調査期間は研究終了後 10 年間以上とし、定期的な外来受診を促す。

なお、臨床研究終了後の定期的外来診療で得られた追跡調査のデータは、解析には含まれない。

22) 臨床研究費用並びに健康被害の補償

22.1. 研究の資金源及び利益相反

本臨床研究に関して、外部からの資金提供はない。また、利益相反については本学利益相反委員会にて審査される。

22.2. 臨床研究に関する費用負担

本臨床研究にかかる費用は、研究責任者又は大阪大学歯学部附属病院が負担する。

22.3. 健康被害の補償等

本臨床研究に起因して被験者に健康被害が生じた場合の金銭的補償はないが、医師が最善を尽くして適切な処置と治療を行う。ただしその処置や検査、治療に要する費用は患者負担とする。

23) 臨床研究成果の帰属及び研究結果の公表に関するとり決め

本臨床研究により生じる知的財産権は研究者に帰属するものとする。本臨床研究の結果は、総括報告書としてまとめることとする。また必要に応じて論文又は学会発表として公表する。本臨床研究に関し、研究終了前に公表する場合は歯学部倫理審査委員会に、その公表先と内容を申請し、承認を受けなければならない。

公表に際しては被験者の名前が自らの意志意思に反して直接公表されないことがない等、被験者の個人情報の保護については十分に配慮する。

24) 臨床研究実施体制

1) 研究責任者

氏名	機関名、部署・所属、役職、電話番号	臨床研究において果たす役割
村上 伸也	大阪大学大学院歯学研究科 口腔分子免疫制御学講座 口腔治療学教室 (口腔治療・歯周科、 近未来歯科医療センター) 教授 06-6879-2930	臨床研究の総指揮

2) 研究分担者

氏名	機関名、部署・所属、役職、電話番号	臨床研究において果たす役割
北村 正博 (主任)	大阪大学大学院歯学研究科 口腔分子免疫制御学講座 口腔治療学教室 (口腔治療・歯周科、 近未来歯科医療センター) 准教授 06-6879-2931	自己脂肪細胞由来幹細胞の移植
橋川 智子	医療法人松徳会、橋川デンタルクリニ ック、院長 大阪大学大学院歯学研究科 口腔分子免疫制御学講座 口腔治療学教室 (口腔治療・歯周科、近未来歯科医療 センター) 招聘教員 06-6879-2932	自己脂肪細胞由来幹細胞の移植 自己脂肪組織由来幹細胞の調製
山田 聡	大阪大学歯学部附属病院 口腔治療・歯周科 (口腔治療・歯周科、 近未来歯科医療センター) 講師 06-6879-2931	自己脂肪細胞由来幹細胞の移植
島袋 善夫	大阪大学大学院歯学研究科 口腔分子免疫制御学講座 口腔治療学教室 (口腔治療・歯周科、 近未来歯科医療センター) 臨床教授 06-6879-2931	自己脂肪細胞由来幹細胞の移植
野崎 剛徳	大阪大学大学院歯学研究科 口腔分子免疫制御学講座 口腔治療学教室 (口腔治療・歯周科、	自己脂肪細胞由来幹細胞の移植

	近未来歯科医療センター) 助教 06-6879-2931	
佐保 輝之	大阪大学歯学部附属病院— 口腔治療・歯周科 —(口腔治療・歯周科、 近未来歯科医療センター)— 助教 06-6879-2932—	自己脂肪細胞由来幹細胞の移植
柳田 学	大阪大学大学院歯学研究科 口腔分子免疫制御学講座 口腔治療学教室 (口腔治療・歯周科、 近未来歯科医療センター) 助教 06-6879-2932	自己脂肪細胞由来幹細胞の移植
山下 元三	大阪大学歯学部附属病院 口腔治療・歯周科 (口腔治療・歯周科、 近未来歯科医療センター) 助教 06-6879-2932	自己脂肪細胞由来幹細胞の移植
竹立 匡秀	大阪大学大学院歯学研究科 口腔分子免疫制御学講座 口腔治療学教室 (口腔治療・歯周科、 近未来歯科医療センター) 助教 06-6879-2932	自己脂肪組織由来幹細胞の採取補助お よび調製
北垣 次郎太	大阪大学歯学部附属病院 (口腔治療・歯周科、 近未来歯科医療センター) 特任助教講師 06-6879-2932	自己脂肪組織由来幹細胞の調製
小笹 匡雄	大阪大学歯学部附属病院 口腔治療・歯周科 (口腔治療・歯周科、 近未来歯科医療センター) 医員 06-6879-2932	自己脂肪組織由来幹細胞の採取補助お よび調製
梶川 哲宏	大阪大学歯学部附属病院 口腔治療・歯周科 (口腔治療・歯周科、 近未来歯科医療センター) 医員 06-6879-2932	自己脂肪組織由来幹細胞の調製
大原 廣之	大阪大学歯学部附属病院— 口腔治療・歯周科	自己脂肪組織由来幹細胞の調製

	—(口腔治療・歯周科— 近未来歯科医療センター)— 医員 06-6879-2932—	
沢田 啓吾	大阪大学大学院歯学研究科 口腔分子免疫制御学講座 口腔治療学教室 (口腔治療・歯周科、 近未来歯科医療センター) 大学院生 06-6879-2932	自己脂肪組織由来幹細胞の調製
伊山 舜吉	大阪大学大学院歯学研究科 口腔分子免疫制御学講座 口腔治療学教室 (口腔治療・歯周科、 近未来歯科医療センター) 大学院生 06-6879-2932	自己脂肪組織由来幹細胞の調製
栗田 敏仁	大阪大学大学院歯学研究科 口腔分子免疫制御学講座 口腔治療学教室 (口腔治療・歯周科、 近未来歯科医療センター) 大学院生 06-6879-2932	自己脂肪組織由来幹細胞の調製補助
森 健太	大阪大学大学院歯学研究科 口腔分子免疫制御学講座 口腔治療学教室 (口腔治療・歯周科、 近未来歯科医療センター) 大学院生 06-6879-2932	自己脂肪組織由来幹細胞の調製補助
山本 智美	大阪大学大学院歯学研究科 口腔分子免疫制御学講座 口腔治療学教室 (口腔治療・歯周科、 近未来歯科医療センター) 大学院生 06-6879-2932	自己脂肪組織由来幹細胞の調製補助
李 千萬	大阪大学医学部附属病院 未来医療センター 特任准教授 06-6879-6551	自己脂肪組織由来幹細胞の採取
大阪大学医学部附属病院 未来医療センター		共同研究

3)研究協力者

(1)大阪大学医学部附属病院未来医療センター協力者

氏名	機関名、部署・所属、役職、電話番号	臨床研究において果たす役割
江副 幸子	大阪大学医学部附属病院 未来医療センター 特任講師 連絡先：06-6879-6552	プロジェクトマネジメント
名井 陽	大阪大学医学部附属病院 未来医療センター 副センター長・准教授 連絡先：06-6879-6551	臨床研究品質管理
上坂 浩之	大阪大学 臨床医工学融合研究教育センター 特任教授 連絡先：06-6879-6551	臨床研究アドバイザー
大河原 弘達	大阪大学医学部附属病院 未来医療センター 臨床検査技師 連絡先：06-6879-6551	感染症検査 品質管理責任者
長尾 杏奈	大阪大学医学部附属病院 未来医療センター 特任技術職員(臨床検査技師) 連絡先：06-6879-6560	感染症検査
山地 学	大阪大学医学部附属病院 未来医療センター 上級オフィサー 連絡先：06-6879-6551	プロトコール作成支援
花井 達広	大阪大学医学部附属病院 未来医療センター 安全情報管理部門 06-6879-6552	プロトコール作成支援
大倉 華雪	財団法人 先端医療振興財団 膝島肝臓再生研究グループ 078-304-8706	プロトコール作成支援

(2)臨床研究コーディネーター

氏名	機関名、部署・所属、役職、電話番号	臨床研究において果たす役割
小巻 正泰	大阪大学医学部附属病院 未来医療センター コーディネーター 06-6879-6552	コーディネート
佐野 夕子	大阪大学医学部附属病院 未来医療センター コーディネーター 06-6879-6552	コーディネート
砂山 陽子	大阪大学医学部附属病院 未来医療センター コーディネーター 06-6879-6552	コーディネート
浅井 睦	大阪大学医学部附属病院 未来医療センター コーディネーター 06-6879-6552	コーディネート
島本 知美	大阪大学医学部附属病院 未来医療センター コーディネーター 06-6879-6552	コーディネート

(3)モニター

氏名	機関名、部署・所属、役職、電話番号	臨床研究において果たす役割
墨田 梨絵	大阪大学医学部附属病院 未来医療センター モニター 06-6879-6552	モニタリング業務
渡邊 貴恵	大阪大学医学部附属病院 未来医療センター モニター 06-6879-6552	モニタリング業務

(4)統計解析及びデータマネジメント担当者

氏名	機関名、部署・所属、役職、電話番号	臨床研究において果たす役割
山本 紘司	大阪大学医学部附属病院 臨床試験部 06-6879-5111 Fax:06-6879-6092	統計解析担当
長尾 杏奈	大阪大学医学部附属病院 未来医療センター 特任技術職員 06-6879-6560 FAX:06-6879-6536	症例登録主担当 データマネジメント主担当

4)データセンター

名称	所在地、電話番号
大阪大学医学部附属病院 未来医療センター＝データ センター	大阪府吹田市山田丘 2-15 06-6879-6560 FAX:06-6879-6536 受付時間 9:00~16:00

5)事務局

名称	所在地、電話番号
大阪大学医学部附属病院 未来医療センター	大阪府吹田市山田丘 2-15 06-6879-6552 irb-jimu@hp-mctr.med.osaka-u.ac.jp

6)緊急連絡先

名称	所属、代表者、所在地、電話番号
研究チーム	大阪大学歯学部附属病院 口腔治療・歯周科 村上 伸也、北村 正博、橋川 智子、山田 聡、島袋 善夫、野崎 剛徳、 佐保 輝之、柳田 学、山下 元三、竹立 匡秀、北垣 次郎太、小笹 匡雄、 夫原 廣之、梶川 哲宏、沢田 啓吾、伊山 舜吉、粟田 敏仁、森 健太、 山本 智美 大阪府吹田市山田丘 1-8 06-6879-2932

大阪大学医学部附属病院 未来医療センター	大阪府吹田市山田丘 2-2 06-6879-6552 irb-jimu@hp-mctr.med.osaka-u.ac.jp
-------------------------	---

25) 文献

- 1) 平成17年度 永久歯抜去原因調査報告書 (8020財団)
- 2) 平成8年 口腔保健と全身的な健康状態の関係に関する研究
- 3) Marshall-Day CD et al. Periodontal Disease: Prevalence and incidence. *J. Periodontol.*, 26:185, 1955.
- 4) 平成17年 歯科疾患実態調査結果 (厚生労働省統計一覽)
- 5) 平成18年度 社会医療診療行為別調査 (厚生労働省大臣官房統計情報部編)
- 6) Kitamura M, Nakashima K, Kowashi Y, Fujii T, Shimauchi H, Sasano T, Furuichi T, Fukuda M, Noguchi T, Shibutani T, Iwayama Y, Takashiba S, Kurihara H, Ninomiya M, Kido J, Nagata T, Hamachi T, Maeda K, Hara Y, Izumi Y, Hirofuji T, Imai E, Omae M, Watanuki M, Murakami S. Periodontal tissue regeneration using fibroblast growth factor-2: Randomized Controlled Phase II clinical trial. *PLoS One*, 3: e2611, 2008.
- 7) Consensus Reports from the 1996 World Workshop in Periodontics. The American academy of periodontology.

臨床研究実施計画書、症例報告書及び同意説明文書改訂履歴

改訂版	改訂年月日
臨床研究実施計画書改訂履歴	
症例報告書改訂履歴	
同意説明文書改訂履歴	

再生 歯科医療

削る・詰めるから「取り戻す」へ

- 13:00～13:10 ●開会の挨拶
森崎市治郎 大阪大学歯学部附属病院院長
- 13:10～13:30 骨惜しみしないライフワークのために
西村理行
大阪大学大学院歯学研究科 生化学教室 准教授
- 13:30～13:50 歯茎から作れる万能細胞～iPS細胞で夢の再生医療へ～
江草 宏
大阪大学大学院歯学研究科 歯科補綴学第一教室 助教
- 13:50～14:10 口唇裂・口蓋裂の形態と機能の再建
古郷幹彦
大阪大学大学院歯学研究科 口腔外科学第一教室 教授
- 14:10～14:30 休憩
- 14:30～14:50 インプラント治療を視野にいった骨移植と骨再生医療
岩井聡一
大阪大学大学院歯学研究科 口腔外科学第二教室 助教
- 14:50～15:10 「橋渡し研究」って何？—みんなで考えましょう。再生歯科医療の未来—
村上伸也
大阪大学大学院歯学研究科 口腔治療学教室 教授
- 15:10～15:30 休憩
- 15:30～15:50 総合討論
- 15:50～16:00 ●閉会の挨拶
脇坂 聡 大阪大学大学院歯学研究科長・大阪大学歯学会会長
- 司会 天野敦雄 教授

平成23年10月15日(土) 毎日新聞ビルB1オーバルホール

主催：大阪大学歯学部附属病院 共催：大阪大学歯学部・大学院歯学研究科/大阪大学歯学会

後援：大阪大学歯学部同窓会/大阪府/吹田市教育委員会/毎日新聞社

夢の歯科治療をバーチャル体験

森崎 市治郎

●大阪大学歯学部附属病院 院長



人間が身体の一部を失ったとき、これまでは代りのもので機能を補ってきましたが、なかでも「義歯」は最も広く用いられているものの一つです。最近ではインプラント(人工歯根)をはじめ、顎骨の欠損部に骨を移植したり、骨や歯ぐきと歯を再生させるなどの革新的な治療法も開発されてきました。

今回のフォーラムでは、大阪大学歯学部創立60周年を記念して、近未来の歯科医療技術について、最前線で研究と治療を行っている講師陣に語ってもらえるよう特集を組みました。実現されつつある夢の治療法を、バーチャル体験していただければ幸いです。

新しい歯科医療の創生へ向けて

脇坂 聡

●大阪大学大学院歯学研究科長・大阪大学歯学会会長



今年は大阪大学歯学部が創立され60周年の節目の年となります。このような記念すべき年に、例年通り市民フォーラムを開催することが出来、関係者一同大変喜んでおります。今まで歯科というと、「上手に歯を削ってきれいに詰め物をする」というイメージでとらえられてきました。近年の科学の進歩により、体を構成する物質の分子の機能を解析し、生命現象を分子レベルで理解し、失われた体の組織を再生させる試みがなされ、その一部は臨床応用されるようになってきています。歯科領域でも再生歯科医療が注目され、いずれは将来の歯科治療の主流となると思われます。今回は大阪大学歯学研究科・歯学部附属病院で行っている「再生歯科医療」の研究・臨床の最新のトピックスをご紹介します。歯科医学・歯科医療の重要性を再認識していただければ幸いです。

骨惜しみしない ライフワークのために


西村 理行

 ●大阪大学大学院歯学研究科
生化学教室 准教授

超高齢化社会になって、骨および軟骨(関節)の病気が急増し大きな社会問題になっています。骨・軟骨は、骨格や歯の形成や維持、運動などに欠かせない器官です。最近の研究により、骨・軟骨には内臓と同じような機能もあって、多様な役割を果たしていることが明らかにされつつあります。そこで、このような骨の多彩な機能を紹介し、基礎医学研究者の立場から骨・軟骨の病気に対して現在行われている治療法と、将来は可能になる治療法についても紹介させて頂きたいと思います。

近年、私たちの体の細胞から、どんな細胞にもなるという万能細胞を作り出す技術が開発されました。マスメディアでも何かと話題になる「iPS細胞」。どのように私たちの治療に役立つのでしょうか?大阪大学では、歯科治療の過程で切り取って捨てていた「歯茎(はぐき)」からiPS細胞を作製し、これを再生医療にリサイクルする技術の開発に取り組んでいます。今回は、歯茎から作るiPS細胞が可能にする近未来の医療技術について、夢のあるお話をしてみたいと思います。

歯茎から作れる万能細胞 ~iPS細胞で夢の再生医療へ~


江草 宏

 ●大阪大学大学院歯学研究科
歯科補綴学第一教室 助教

口唇裂・口蓋(こうがい)裂はくちびると上顎からのどんこまでの形態と機能の問題をかかえて赤ちゃんが生まれています。治療はその形と機能を正常にすることにあります。それは赤ちゃんの成長を考えながら口や顔面の再建を図ることになります。単に裂隙を閉じるのではなくこの疾患のあるお子様を健全に育成することが治療の目標です。講演では口唇裂・口蓋裂の現状と展望をお話したいと存じます。

口唇裂・口蓋裂の 形態と機能の再建


古郷 幹彦

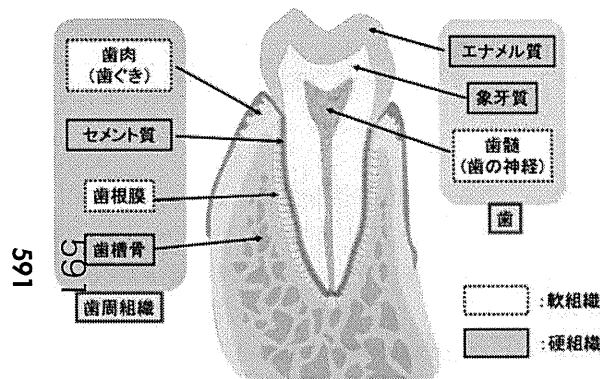
 ●大阪大学大学院歯学研究科
口腔外科学第一教室 教授

お口の
マメ
知識

歯周組織再生療法

口腔治療・歯周科 科長 村上 伸也

口腔治療・歯周科 副科長 北村 正博



健康な歯と歯周組織の構造

歯は、歯肉、歯根膜、セメント質、歯槽骨の4つの組織で構成される歯周組織により支えられています(上の図を参考にして下さい)。従来から行われてきた歯周病の治療では、一度失われた歯周組織を元通りに回復させることは不可能でした。ところが、歯根膜の中に歯周組織をもう一度再生してくれる幹細胞が大人になっても存在していることが近年明らかにされ、この幹細胞を刺激し活性化することにより歯周組織そのものを復活させる歯周組織再生療法が近年開発されてきました。当院では、上の写真(治療前)のような重度の歯周炎により歯槽骨が大きく吸収したケースに対しても、GTR法(歯周組織再生誘導法)やエナメルマトリックスタンパクを用いた歯周組織再生療法を臨床応用して良好な治療成績を上げています。



治療前



治療後

「骨移植手術」について

口腔外科1制御系 科長 古郷 幹彦

「口唇裂・口蓋(こうがい)裂」を持つお子さんが上あごの歯茎の骨を回復するために行う「骨移植手術」をご紹介します。

口唇裂・口蓋裂のお子さんは、生まれつき上あごの一部に左右の組織が繋がっていない隙間があります(図1上)。この隙間をいつまでも残しておくとも摂食や発音に問題がでるため、1歳半頃までに手術を行って閉じてしまいます。その結果、見た目には左右の組織が繋がって隙間が無くなりますが(図1下)、CT(レントゲンの断層撮影)を撮ってみると実は上あごの骨の隙間はまだ残っていることがわかります(図2)。先にも述べたように骨が無い場所に歯は生えることができないので、このままではこの骨の隙間のところの歯並び

が抜けてしまいます。そのため、手術を行ってこの骨の隙間に他の場所から採取した骨を移植します(図3)。最近ではβリン酸カルシウムを材料とした骨補填剤を使うことによって、採取する骨の量をできるだけ少なくすることができるようになってきました。それによって、これまではたくさんの骨を採ることができる腰骨から骨を採取することが一般的でしたが、下あごから採取した骨で上あごの骨の隙間を埋めることができるようになってきています。下あごからの骨の採取(図3では下あごの囲い線の部分から骨を採りました)は腰骨からの手術と比べてより軽い手術ですむため、手術後の患者さんの負担をより少なくすることができます。

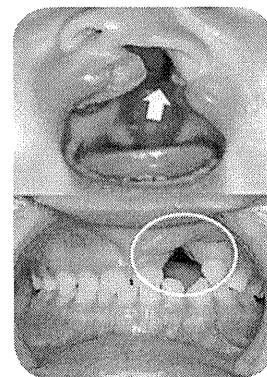


図1：上は生後1ヶ月、下は5歳のお口の写真

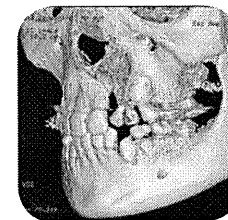


図2：10歳の時のCT

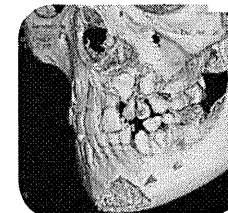


図3：骨移植手術後のCT

お口の
マメ
知識

歯科での被曝

放射線科 柿本 直也

歯科を受診すると必ずといっていいほどX線写真(通称:レントゲン写真)を撮影します。大学病院では一日に10枚以上のX線写真を撮影することも稀ではありません。「こんなに被曝して大丈夫かしら?」と心配したことはないでしょうか?

しかしながらヒトは日常生活でも放射線被曝をしていることはあまり知られていません。世界平均で一年間に2.4mSvの被曝をしていると言われています(図1)。これには空気中の被曝、大地からの被曝、宇宙からの被曝など様々な被曝が

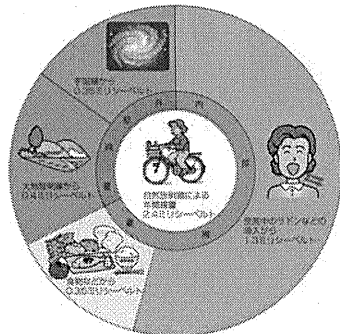


図1: 自然放射線

593

図2:

●実効線量による比較—実効線量(mSv)とは全身の組織と臓器ごとにX線の影響を加味して計算した総線量

※通常、被曝評価は吸収線量(mGy)で行いますが、自然放射線と比較するため実効線量(mSv)を用いています。なお、実効線量はICRP1990勧告(Publication 60)に準拠しています。

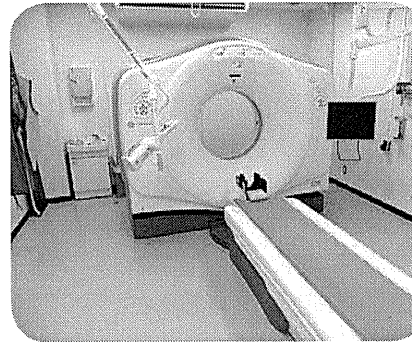
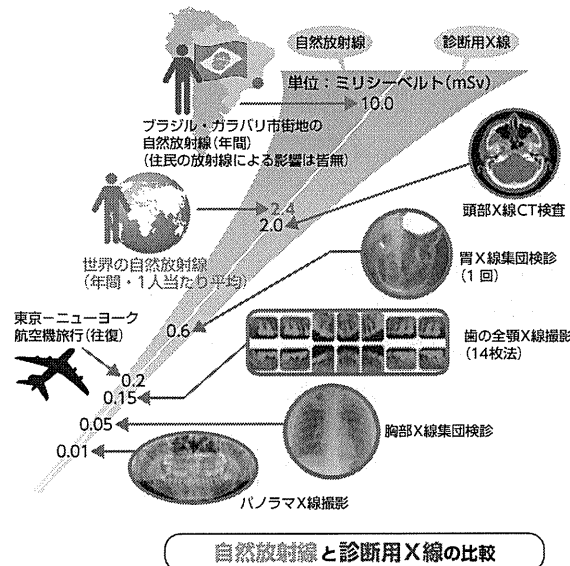


図3: 医科用CT

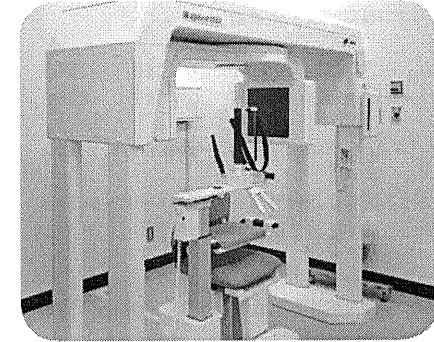


図4: 歯科用コンベームCT

含まれています。

飛行機などは宇宙に近いところを飛んでいるので、地上より多く被曝していると言われてます(図2)。皆様は、海外旅行により自然放射線の被曝が増加していると考えたことがありますか? おおよそですが、歯の写真10枚(全ての歯のレントゲン写真を撮影する状態でフルマウス撮影10枚法といいます)と東京-ニューヨーク間の往復での被曝線量が同じになります。歯の10枚法のレントゲン検査を拒否する人はいても、ニューヨーク旅行を拒否する人はいないでしょう。

歯科のX線撮影で主なものとしては、お口の中にフィルムを挿入して歯の写真を撮影するデンタルX線写真と、顔の周りを機械が一周してお口全体の写真を撮影するパノラマX線写真があります。これらの被曝線量はデンタルX線写真1枚で0.0163~0.0391mSv、パノラマX線写真1枚で0.0399~0.0436mSvとされていますが、被曝線量を計算するとデンタルX線写真1枚の被曝線量は2~5日分、パノラマX線写真1枚の被曝線量は6~7日分に相当します。これは従来のフィルムを使用した撮影法での話であり、大阪大学歯学部附属病院で採用しているデジタルシ

ステムではより少ないと言われています。

近年はインプラント治療の普及とともに歯科にもCT(Computed Tomographyの略でコンピュータ断層撮影のこと)検査が普及してきました。大阪大学歯学部附属病院にも、64列マルチディテクター型医科用CT(図3)と歯科用コンベームCT(図4)が導入され、口腔外科の疾患のみならず、インプラント検査、矯正治療時の骨格計測、難治性根尖性歯周炎などの検査として利用しています。これらCTでの被曝線量は医科用CTでは0.7~2.0mSv、歯科用CTでは0.11~0.51mSvとされています。ただし、医科用CTで顎の範囲を撮影するなら2~3秒程度で撮影可能ですが、歯科用CTでは17秒かかります。この間に動きがあれば画像が歪みますので再撮影することもあります。撮影範囲も両者で異なりますので、それぞれの疾患に合わせた撮影機器を選択する必要があります。その一因として被曝線量も勘案しなければなりません。

当然、無駄なX線被曝は避けなければなりません。確実な機器管理のもと、少ない被曝線量による正確な検査と正確な診断により皆様のお口の健康維持に務めております。

阪大歯学部の歴史

— 創立60周年記念に当たって

石田 武

大阪大学歯学部同窓会歴史資料館 館長

1 歯学部の誕生

歯学部をつくる動きは大正9年(1920)、大阪大学医学部の前進である大阪医科大学から起こりました。耳鼻科から歯科に移られた弓倉繁家先生を中心に、歯科を「歯抜き」「入れ歯」から医学の1分野にレベルアップさせなければというのが当初の願いでした。

昭和26年(1951)の春に文部省から歯学部設立の認可がありました。1学年の定員を30名とする4年間の歯科医学教育が始まり、国立総合大学の中に日本で初めての歯学部ができました。弓倉先生は初代の歯学部長をされ、学舎の建設、学生定員の充足に獅子奮迅の活躍をされました。その心労のためか、歯学部創立2年後にお亡くなりになりました。先生の遺徳をたたえるレリーフ像は創立20周年記念事業の際に建立され、学部の玄関前にまつられています。

2 中之島時代の歯学部

弓倉先生の没後、建学の精神を受け継がれた初代教授陣は「卒業生が育つまで」を合い言葉に、診療、教育、研究の各方面で活躍されました。歯学部の生みの親である医学部は、口腔領域の手術はほとんど歯学部の口腔外科で扱うように配慮されました。そうしたお陰と担当者の努力があって口腔外科では唇やあごの手術で数多くの業績を残されています。虫歯治療の面では、お歯黒からのヒントでフッ化ジアンミン銀が発明されています。この発明によって、歯科理工学の出賀禮一先生には紫綬褒章が贈られています。昭和35年(1960)には大学院博士課程が新設され各講座の研究活動は大変盛んになりました。昭和40年頃から全国に新設された国立大学の歯学部には、阪大歯学部出身者が教授、教官として数多く赴任されました。



初代歯学部長 弓倉繁家先生

3 吹田キャンパス時代の歯学部

昭和58年(1983)夏に現在の吹田地区へ移転しました。阪大歯学部は平成12年(2000)の大学院重点化に伴い大学院大学となり、歯学部附属病院も日本で唯一の総合大学における歯学部附属病院になりました。また平成17年(2005)には優れた人材を育成し先進的な研究をする国の機関として、大学院歯学研究科がCOE(Center of Excellence)の指定を受け、著しい研究成果を挙げつつあります。そして今年(2011)は昭和26年から数えて丁度還暦の歳を迎えることになりました。同窓会のホームページではこの間の歴史を検証するコーナーを設けています。是非一度ご覧になって下さい。

大阪大学 歯学部の歴史

- 大正15 (1926)年 大阪医科大学(府立)に歯科学教室を設置
- 昭和 6 (1931)年 大阪医科大学(府立)は大阪帝国大学医学部となり、翌7年歯科学講座を設置
- 昭和22 (1947)年 大阪帝国大学が大阪大学と改称
- 昭和25 (1950)年 大阪大学医学部に歯学科を設置
- 昭和26 (1951)年 医学部歯学科が医学部より分離独立し、歯学部創設。6講座、学生定員30名(1学年)をもって発足
- 昭和28 (1953)年 7診療科、27病床をもって歯学部附属病院設置
- 昭和29 (1954)年 第1回卒業生(10名)巣立つ
- 昭和30 (1955)年 歯学専攻科を設置
- 昭和35 (1960)年 次年度より学生定員を40名に増員(14回生)
大阪大学大学院に歯学研究科を設置
歯学部附属歯科技工士学校を設置
- 昭和41 (1966)年 学部学生定員を60名に増員(19回生)
附属病院病床を40床に増床
- 昭和56 (1981)年 学部学生定員を80名に増員(32回生)
- 昭和58 (1983)年 吹田キャンパスに移転
- 平成 2 (1990)年 学部学生定員が65名となる(43回生)
- 平成12 (2000)年 大学院歯学研究科が大学院の重点化に伴い大講座制に移行
- 平成16 (2004)年 国立大学法人大阪大学設立
- 平成19 (2007)年 一般歯科総合診療センター設置
- 平成21 (2009)年 口腔科学フロンティアセンター設置
- 平成22 (2010)年 近未来歯科医療センター設置
- 平成23 (2011)年 学部学生定員が53名となる(64回生)
概算要求特別経費による「国の難病」から挑むライフ・イノベーションプロジェクト開始
口腔科学フロンティアセンターが研究科附属施設となる



大阪市 中之島キャンパス



チームで連携し、 多角的な医療提供

大阪大学歯学部附属病院では、専門領域(口腔外科、小児歯科、歯科矯正科、補綴科、歯周科、保存科、歯科麻酔科、歯科放射線科、予防歯科)に分かれた診療科、診療部(口腔総合診療部、顎口腔機能治療部、障害者歯科治療部)がありそれぞれ特色のある治療を行うとともに、連携したチーム医療を進めてきています。そのひとつに口唇口蓋裂に対する治療があ



り、口腔外科では形成手術を、矯正科では歯列の拡大移動を、顎口腔機能治療部では言語を、補綴科では外観と機能の回復を、歯周科ではメンテナンスを、というように多角的な処置を展開しています。



大阪大学歯学部60周年記念事業
第9回市民フォーラム

再生

歯科医療

削る・詰めるから
取り戻すへ

2011年10月15日(土) 午後1時～
毎日新聞ビル1F オーバルホール

主催：大阪大学歯学部附属病院 共催：大阪大学歯学部・大学院歯学研究科/大阪大学歯学会
後援：大阪大学歯学部同窓会/大阪府/吹田市教育委員会/毎日新聞社

大阪大学歯学部60周年記念事業
第9回市民フォーラム

再生歯科医療

595 外傷・骨折

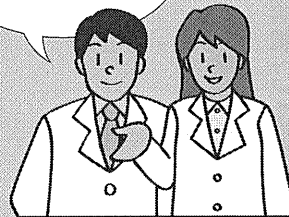
炎症

お口の緊急事態は

深夜受付中 06-6879-2848
受診時は必ず保険証をご持参ください



わたしたちに
おまかせください



- 阪急バス 阪急北千里駅 発
「阪大歯学部病院前経由 阪大医学部病院行」、
「北千里 阪大歯学部病院前経由 阪大医学部病院行」、
「阪大本部前行」
- 北大阪急行千里中央駅 発「阪大本部前行」
- 阪急電車 阪急千里線北千里駅下車、東へ徒歩約25分
- 大阪モノレール 阪大病院前駅下車、徒歩15分
- 近鉄バス JR東海道線茨木駅より「阪大本部前行」
阪急京都線茨木市駅より「阪大本部前行」
- お車でお越しの場合、平日22時以降および
土・日・祝日は「千里門」よりご入構ください

大阪大学歯学部附属病院

吹田市山田丘1-8 電話06-6879-5111

<http://hospital.dent.osaka-u.ac.jp/>

診療時間

平日(月～金)
8:30～17:00



○バリデーション区分:バリデーション(稼動性能適格性の確認)

○ 題 目 : 部屋の稼動性能適格性の確認

○ 目 的 : 各装置内の空調設備を運転し、室内の清浄度を確認する。

○ 実 施 項 目 : 室内の微粒子数を測定し、清浄度を確認する。

○対象となる設備:大阪大学歯学部

測定対象は別紙記載

○引用規格、関連規格:

SMDC10026 バリデーション・サービス技術資料(三洋電機㈱社内規定)

○ 実 施 日 : 2012年3月2日

○ 実 施 担 当 者 : バイオメディカ・ソリューション(株) 南野宏太

○ 結 論 : 各測定対象において、合否判定基準を満足していることを確認した。

測定データは別紙記載

○バリデーション区分:バリデーション(稼動性能適格性の確認)

○ 題 目 : 部屋の稼動性能適格性の確認

○ 目 的 : 各装置内の空調設備を運転し、室内の風量を確認する。

○ 実 施 項 目 : 室内の風速を測定し、全体風量を確認し、換気回数を求める。

○対象となる設備:大阪大学歯学部

測定対象は別紙記載

○ 実 施 日 : 2012年2月24日

○ 実 施 担 当 者 : バイオメディカ・ソリューション(株) 南野宏太

○ 結 論 : 各測定対象において、基準を満足していることを確認した。

測定データは別紙記載